

ずいそう

## 「社会人を芸大の1回生として迎える」

水野 収



工学系大学院を出てから、企業の研究室へ入れてもらうものの、画家の家に育った自分には、何か合わないものを感じていた。かねてから燻っていた画家（日本画）への道を志すべく芸大への受験準備に入る。幸いにも26才で合格し、描ける実力をつけるためにゼロからの出発をする。後になって気付き出すのが、描くことは右脳つまり感性の技、しかし最初は左脳つまり理屈で描いていたようだ。すなわち客観視であった。美しいものを美しいと感じ、そのように描けるようになるのに、10年以上要したと思っている。しかもまだ、修行中と言って良い。20年以上、長期にわたって左脳だけに繋がっていた利き腕は、私の場合10年以上をかけて「徐々に」なのか「ある時ふと」なのか良くわからないが、少しずつ右脳と繋がりはじめたように思う。同級生の特に女性達は、初めから右脳で手が動いているように思えた。羨ましかった。4回生で日展に初入選できたことは、8才年下の感性豊かな同級生達が横で描いているのを見るのが出来たからだと思う。自分にとっては、想定外のやり方をしているのである。

その後、入落を繰り返し、40才頃であったか、3回

連続で落選した。何か大きな壁に当たり、腕いた。その結果、再びゼロからの出発を決意し、中国から西へと中央アジアの一人旅を毎夏しつつ写生を蓄えた。そして新たな表現をめざして制作を続けた。再び入選するようになり、それが10年以上続くと、中国西域を取材する画家として認識されるようになった。目下、絵画教室で、或いは芸大というところで社会人（多くは50才以上）の指導もさせてもらっているが、利き腕が左脳から右脳に繋がりが変わるのに、やはり10年位を要すると感じている。定年後何か感性を伴う生涯学習として、作品制作を志ざされる方は、どうかこのことを思い出し、長く諦めずに、続けてほしいものである。真に「継続は力なり」と言えるようである。

私の場合、鉛筆のHBぐらいの硬さで筆圧をかけると文字を書く方（左脳）に繋がりが4B～8Bの柔らかい鉛筆を軽く持つと、感じた線の表情を感じた様に描ける（右脳）に繋がるように思う。自分なりにそういうswitching法を見い出すと新たな世界が開けるのではないだろうか。楽しく試みて下さい。

—みずの おさむ 日展日本画会友（無鑑査）奈良芸術短期大学講師  
京都造形芸術大学通信部講師 朝日カルチャー大阪教室講師—

